

MUIによる旧足尾銅山と塩谷核廃棄物処理場予定地調査

ハユ・プラヴォオ

インドネシア・ウラマー評議会 (MUI) の自然環境・天然資源改善部会 (PLH & SDA) は、① [栃木県日光市] 足尾地区の銅山採掘跡の復興と、② [栃木県] 塩谷町の福島原子力発電所による放射能汚染廃棄物の処理問題に関して、現場視察を実施する機会を得た。この調査は、2017年7月14日から18日、代表者ハユ・プラヴォオ (PLH & SDA 議長) によって実施された。調査には、イスラームと自然環境をテーマにした調査研究のためにインドネシアを頻繁に訪問している2人の日本人専門家も同行した。青木武信・千葉大学客員教授 (インドネシアを専門とする人類学者、インドネシア語が堪能) と阿久津正幸・NPO「足尾に緑を育てる会」 (イスラーム史家、アラビア語が堪能) である。

この調査の目的として、日本の研究者は、これらの問題に関する宗教的な側面についての展望を得るとともに、日本における環境問題とその対策を国際的に広めることを期待した。一方でインドネシアの研究者は、日本が経験し、行ってきたことから何らかの有益なものを得ることを期待した。

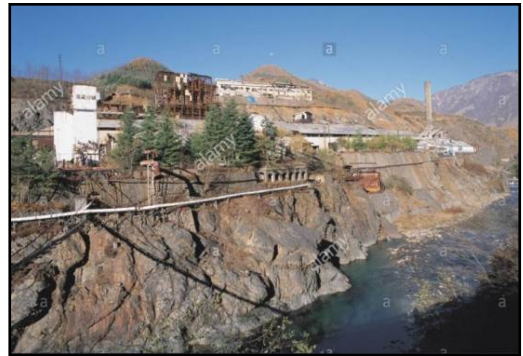
旧足尾銅山の森林回復

足尾は東京から150km離れた、栃木県の美しい山地にある。

この銅山は非常に長い歴史をもっている。1550年にはすでに操業が行われていて、その歴史は約4世紀間にわたる。銅は硬貨や銃弾の製造に利用され、また外貨獲得のためにヨーロッパに輸出もされた。この銅山一体には、1000kmを超える地下坑道がある。第二次世界大戦中、この銅山では中国や韓国の抑留者が働いていた。



1880年代には深刻な汚染が問題化し、[公害対策費用のため抑えられた賃金が理由で] 1907年の鉱夫たちの暴動の引き金となった。1880年以降、銅山の下流の渡良瀬川と利根川流域の住民は、川魚が死ぬような水質汚染を経験した。10年のうちに、川の魚類はほぼ全滅し、両河川流域の漁師たち約3000人は職を失った。



その他に、足尾の銅山採掘事業の発展は木材需要も増大させ、丘陵地の森林が禿げ山となった。その結果、1890年には大洪水が発生し、銅山の廃液が肥沃な地域に広がり、全体が汚染されて枯れ野となった。1896年、さらにより大規模な洪水が再発し、より深刻な被害を引き起こした。最終的に1897年、政府がようやく動き、銅山を経営する企業の古河は汚染問題を軽減するための浄化装置を設置し始めた。

こうした汚染が続くなかで、田中正造はこの災いを天皇に伝えた。しかしながら、この問題に対しては反響もなく、抗議が数年間続いた [だけだった]。1911年、日本政府は工場法を施行した。これは日本初の工業による公害対策の法律であった。足尾銅山の歴史的経緯は以下の通り。



- 1550年 銅山発見
- 1823～1903年 生産最盛期、いくつかの新技术が開発される
- 1900年代 抗議活動や[環境]回復の試みが始まる
- 1973年 銅山閉鎖
- 1996年 NPO「足尾に緑を育てる会」設立
- 2006年 地域の自治体から NPO へ[緑化事業の]場所が提供される。緑化運動が急速に進む。NPO による積極的な宣伝活動と一般市民の参加[を促す活動]、そして教育を通じた活動による。

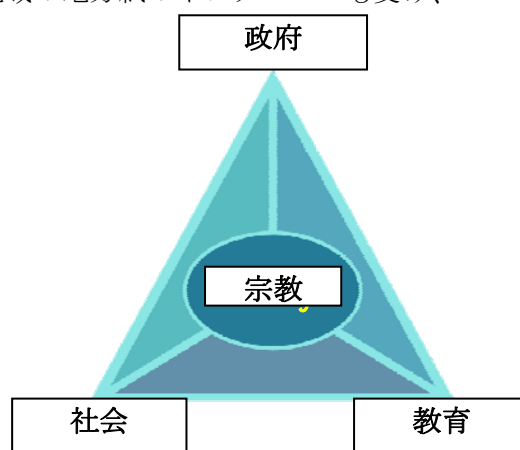
100年以上、この環境問題への対応は続き、政府と地域社会はさまざまな対策を実施してきた。そのなかで、技術的かつ社会的なよい経験が多く得られた。私の見たところでは、日本にとってこの環境問題の経験は非常に有益であるように思われる。それは以下の通りである。

- 1.この環境問題は、公立小学校の教科書の教材となっており、過去の世代の過ちを学ぶ教訓となっている。この方法によって若い世代の意識が啓発され、具体的な関心をもって数千の生徒たちがここで植樹するようになり、関心が具体的な実践へと実った。
- 2.足尾銅山採掘跡は歴史的記念碑となり、観光地となった。環境について一般の人々に広く考えてもらうための交流イベントや、アーティストが参加するさまざまな活動が銅山跡地で実施されている。
- 3.自然の回復は、政府による対策だけでは不可能なのは明らかである。社会と教育の総合的な政策が必要である。政府・社会・教育の一体的取り組みである。この取り組みは、1996年以降のNPOが活発な推進力となって、進められてきている。

足尾を訪問した機会に、数十人の小学生たちと一緒に、植樹用に1本の苗が私にも与えられた。植樹参加者は、苗木、土、肥料、水入りボトル、石ころの多い地面を掘るための専用の小さい鍬の入ったバケツを渡された。また、地域の地方紙のインタビューも受け、翌日には記事が掲載された。

現在、日本は一般の人々を動かす接着剤としての文化や教育に期待しているだけである。日本側の研究者は、宗教が3つの要素(政府、教育、社会)の接合を強化できるとみている。彼らは、環境問題対策に関して、インドネシアは他のイスラーム諸国と比較して大きく先行しているとみている。

インドネシアにも多くの鉱山があり、足尾銅山での世代を超えた対策から多くを学ぶ必要がある。教育はとても重要なものであり、教育により後の世代が先の世代の過ちを繰り返さないようになる。また、破壊された環境を修復する努力には、長い時間と継続性を要する。われわれの後に続く世代への教育を通じて、このことは達成することができる。



ックで、オーストリアの「ホ
スタウン」に登録された
ことから「市を挙げて盛り
上げ、おもてなしの心で迎
えたい」と意気込みを語っ
た。ディーツクマンさんは
「私の作品が皆さんにお楽
しみいただけて、姉妹都市
交流に貢献できれば幸いで
す」と話した。
午前10時〜午後5時（最
終日は3時）。入場無料。
開同協会0287・62・
7324。

**足尾など視察し
環境問題考える**
インドネシアの専門家
【日光】日本の環境問題
への理解を深めようと、イ
ンドネシアのイスラム教代
表者組織「ウラマー評議会」
の評議員ハユ・プラボウォ

さん（55）が15日、足尾町
を訪問し、旧足尾銅山の煙
害で荒廃した松木地区の視
察や植樹を行った。写真。
プラボウォさんは国際的
な森林保護などに取り組ん
でおり、国連気候変動枠組
み条約第21回締約国会議
（COP21）にも参加した。



NPO法人「足尾に緑を育
てる会」メンバーとの親交
があり、視察が実現した。
この日は同国の環境問題
に詳しい千葉大の青木武信

客員教授（53）も同行。足
尾環境学習センターや煙害
で姿を消した松木村跡地を
見て回り、植樹のため訪れ
た横浜市の小学生たちと広
葉樹の苗木を植えた。
16、17の両日は塩谷町を
訪れ、放射性物質を含む指
定廃棄物の詳細調査候補地
視察や住民らとの意見交換
を行う予定。プラボウォさ
んは「日本は文化として多
くの人が自然保護に関わ
り、意識が高い。若い人に
対する教育活動も参考にな
った」と話していた。

の普及活動を拡大しようと